

パイプオルガン・レクチャーコンサート及び東京音楽大学にあるライル社製のオルガンについて

著者	丹羽 正明
雑誌名	ライブラリーレポート
号	3
ページ	3-30
発行年	2015
出版者	東京音楽大学附属図書館
ISSN	2188-4706
著者版フラグ	author
URL	http://id.nii.ac.jp/1300/00001075/

「パイプオルガン・レクチャーコンサート 及び 東京音楽大学にあるライル社製のオルガンについて」

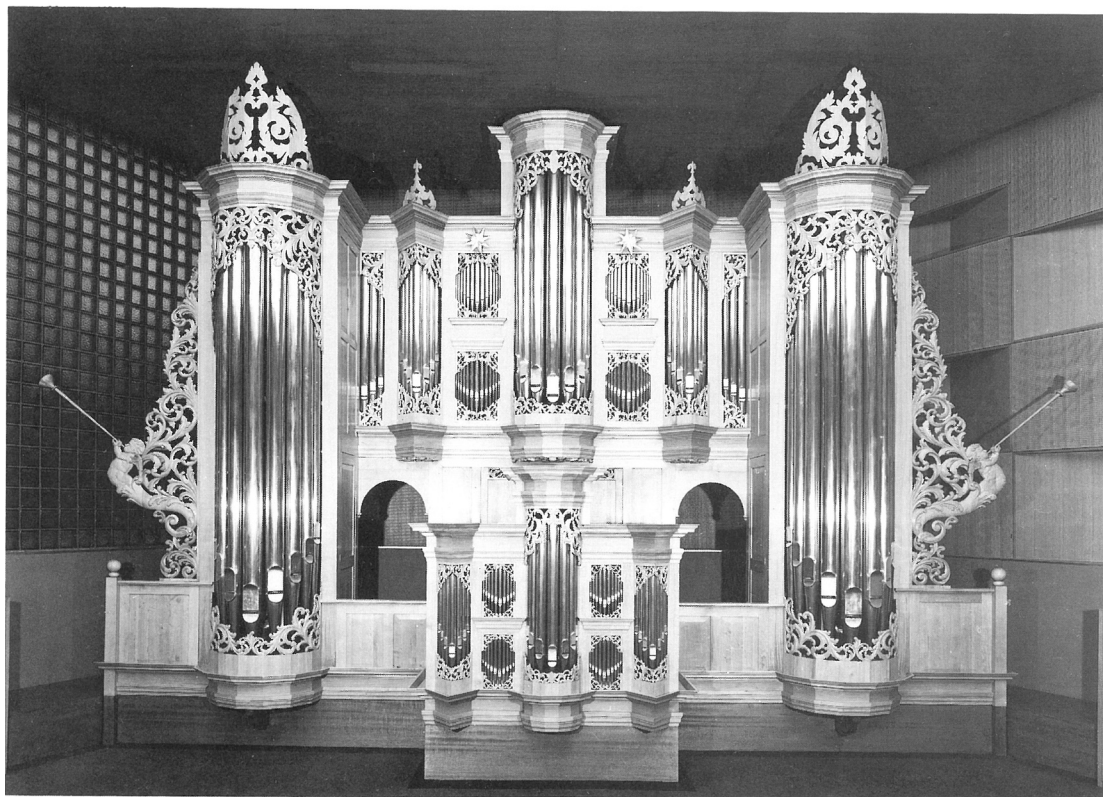
丹羽 正明

東京音楽大学にあるライル社製のオルガン

第一スタジオ (B-100) のオルガン。

オランダ・ライル社製。3段手鍵盤、ペダル鍵盤。31 ストップ。パイプ総数 2071 本。メカニカルアクション (リュック・ポジティブ型を採用)。

調律法は、一部修正されたヴェルクマイスター第三調律法。電動送風機及び 3 個の足踏み式鞆 (ふいご) を備える。1979 年 (昭和 54 年) 3 月設置。



東京音楽大学 第一スタジオのオルガン (出典: 吉田實他編『日本のオルガン』日本オルガニスト教会, 1985年, 84頁)

Organ in Tokyo College of Music

installed in Studio in 1979

built by GEBR. REIL ORGELMAKERY, Heerde, The Netherlands

DISPOSITION:

Hoofdwerk (II) C-f³

Praestant	8'
Quintadeen	16'
Gemshoorn	8'
Octaaf	4'
Nasard	3'
Octaaf	2'
Mixtuur	IV-V
Trompet	8'

Rugwerk (I) C-f³

Praestant	4'
Holpijp	8'
Quintadeen	8'
Roerfluit	4'
Octaaf	2'
Sifflet	1 1/3'
Sesquialter	II
Scherp	IV
Dulciaan	8'

Borstwerk (III) C-f³

Fluit Douce	8'
Ged. Fluit	4'
Woudfluit	2'
Quint	3'
Scherp	III
Kromhoorn	8'

Pedaal C-f³

Praestant	16'
Subbas	16'
Octaaf	8'
Octaaf	4'
Mixtuur	IV
Bazuin	16'
Trompet	8'
Cornet	2'

Couplers: Bw/Hw (shove in), Hw/Ped

Tremulant to whole organ

Cymbelster

Calcant

Mixtuur/Terts af (Terts is off from Mixtuur by pulling out Terts knob)

Compass: C-f^m (54 notes), pedal C-f (30 notes)

Mechanical key and stop action (suspended)

3 hinged bellows (operated either by foot or by electric motor), W/P 76mm

Werckmeister III Temperament (modified)

The tonal model for this organ is the organ in St. Willehadi Church in Osterholz-Scharmbeck near Bremen, West Germany, built by Erasmus Bielfeldt, one of the pupils of Arp Schnitger, in 1734.

Designer: Wicher Albertus Reil

Voicer : Johann Ludwig Reil

Wood carving: Michael Moser, Kollerschlag, Austria

カプラー: Bw/Hw(おし込み式), Hw/Ped

すべてのベルクへのトレモロ

ツィンベルシュテルン

カルカント

ミクスチュアよりテルツを除くノブ(ノブを引き出すことによってテルツがオフとなる)

音域: C-f^m (54音), ペダル C-f (30音)

トラッカー・キー・アクション

手動式ストップアクション 楔型ふいご3個

(足踏み、又は電動モーターで操作される) 風圧76ミリ

調律法: いく分修正されたベルクマイスターIII

このオルガンの音響上のモデルは、西ドイツ、ブレーメン近郊「オスターホルツ・シャルムベック」の聖ピレハーディ教会のオルガンで、アルプ・シュニットガーの弟子エラスムス・ビールフェルトが1734年に作った楽器である。

設計: ビッヒャー・アルベルトゥス・ライル

整音: ヨーハン・ルードビッヒ・ライル

木彫: ミヒャエル・モーザー(オーストリア, コラーシュラーク)

オルガンの演奏に際して、パイプに風を送るための送風装置は、現代では電動の送風機が使われているが、かつて人類が電気の使い方を知らなかったときは、手や足を使って鞆を操作するのが普通だった。そんな時代に作られた笑い話に、送風係の人足に与えるチップが少ないと、腹いせに、演奏中に空気が来なくなってオルガニストを困らせた、などという話が伝えられている。本学のオルガンに備えられている鞆は、決して話題作りにしたことではなく、れっきとした理由があった。それは、この楽器の製作理念が、昔の優れたオルガン製造のやり方を踏まえることにあったので、送風装置もそれに従ったからである。その原理とは、現代のオルガンで使われている電動送風機で送られる空気は、モーターのスクリューで発生させるものなので、渦を巻いているため、パイプの発音に好ましくない影響を与える恐れがあるとされるからだ。その点、鞆で作られた風はストレートにオルガンの空気チャンネルを通してパイプまで届くので、信頼性が高いとされる。本学のオルガンの鞆が収められている小屋は、楽器の真後ろの、建物の外壁沿いに置かれていて、壁に開けられた管を通して空気が送られてくる仕組みになっている。その鞆は、3個が横に並んでいて、足で踏み込んで風を入れる。演奏中に空気が減って来ると、木の太い把手が徐々に上がってくるのを、体重を掛けた足で踏み下ろす。三つの鞆を順に動かすのは結構忙しい作業であって、先に紹介した昔の人足のエピソードが実感できたのだ。勿論、通常の演奏では、いちいち人手を煩わすわけにはいかないので、電動モーターで行われている。

現代に新しく作られたオルガンにおいては、流石に鞆だけの送風装置を備えたオルガンは見当たらない



フェリス女学院大学フェリスホールのオルガン（出典：吉田實他編『日本のオルガンⅡ』日本オルガニスト教会、1992年、94頁）

いが、電動モーターと併設して、輔も備えている楽器は存在する。横浜のフェリス女学院大学音楽学部フェリスホールに設置されているオルガンもそうだ。アメリカのテイラー&ブーディ社製の44ストップの楽器(1989年12月設置)で、これに足踏み式送風装置が備えられている。同大学の林佑子先生に伺った話だが、このオルガンの披露演奏会の折り、初日は電動送風機を使って演奏し、翌二日目には足踏み式で行ったところ、その演奏を耳にした守衛さんが、「今日は良い音ですね」と、感想を漏らしたとか。必ずしも音楽専門家でなくても美しいオルガンの響きは受け入れられるというエピソードである。

序でに、ペダル(足鍵盤)について、ここで触れておきたい。本学のライル・オルガンは勿論、平行ペダル鍵盤になっている。一頃の世界的流行現象で、ペダル鍵盤の形状を、人間工学の知見を取り入れるとして、前方が開いた扇形に作られたる楽器がよくあった。その方が足を自然に使えるという理屈なのだが、実際にはかえって不便で、殊に古典的なフットワークには邪魔になるそうだ。幸いこれは一時の現象に終わり、最近は余り見なくなった。科学的進歩なるものを、楽器作りに短絡的に取り入れる、皮相的な流行現象の悪しき一例だろう。

本学の楽器のモデルは、北ドイツのプレーメン近郊オスターホルツの聖ヴィレハーディ教会の楽器(アルプ・シュニットガーの弟子エラスムス・ビールフェルト製作。1734年)である。外形デザインの特徴は、「黄金分割」の比率が適用されて、極めて美しく均整の取れた外観を示している点にある。

ライル社「ライル兄弟オルガン製作所」について

「ライル兄弟オルガン製作所」は、オランダのヘルダーラント州ヘルデに工房を持つオルガンビルダーで、1934年に彼らの父のヨハン・ライル(ドイツ出身)によって設立された。1960年に、この先代ヨハンの没後に会社を継いだのが、二人の息子ヨハンとアルベルトで、これ以来「ライル兄弟オルガン製作所」を名乗るようになった。当時のヨーロッパのオルガン界では、バロック時代及びそれ以前のオルガンについての関心が高まり、由緒ある教会などに備えられていた昔のオルガンを修復する依頼がライル社にも数多く寄せられるようになっていた。その仕事を通じて、彼らは昔のオルガン・パイプのメンズール(直径と長さの比率。音色に関係する)や、各部分の計測を数多く行い、昔の優れたオルガン製造の秘密を解明して、自社の楽器製作にそれを生かすようになった。ライル社があつた地域である、オランダ北部のフリースランド、フローニンゲン両州には、バロック時代の北ドイツのオルガン製造の巨匠アルプ・シュニットガー作の楽器や、シュニットガー一門の手になるオルガンが数多く残されていて、これらの名器の修復

作業を通じて、彼らは貴重な経験を重ねることが出来たのだった。年代からすると今から数百年前の古いオルガンの響きは、現代のいわゆる「ネオ・バロック・オルガン」の音色と比べると、格段に美しいことを知ったのだった。そして、ライル兄弟は「より美しいオルガン」を作るため、今日の製法ではなく、文献などに記されている昔の方法で作る試みを実行することにした。その手始めとして、1974年に、フローニンゲン州アウトハウゼンのオランダ改革派教会にあるシュニットガー作のオルガンのコピー楽器を完成させた。これがヨーロッパで大きな反響を呼び、彼等が行なった、昔のオルガン製作技法を現代へ復活させる努力が、オルガン界で注目を集めた。この経験が、ライル社のオルガン製作の基本理念となり、本学のオルガン製作にもそれが生かされている。

我が国とオルガン

日本語の「オルガン」の語源は、ポルトガル語から。

オルガンというこの楽器の呼び名は、ポルトガル語からの借用語であると考えられている。欧米の主な言語では、カタカナ表記すると、英語では「オーガン」、ドイツ語は「オルゲル」、フランス語は「オルグ」、音楽用語の老舗イタリア語では「オルガノ」であって、どれも「オルガン」とは違う。

我が国はポルトガルとは、室町時代末期から江戸時代初期にかけて通交があり、多くの文化的影響を受けていた。現在、日常に食されている「カステラ」というお菓子は、当時ポルトガル人から製法を教えられたものだそうで、原地の地名カステーユが語源と言われているが、それと同じく、オルガンもポルトガル語からの借用語であるとみられている。

因みに、その当時わが国に滞在していたポルトガルのイエズス会宣教師たちが、長崎で編纂して、慶長8年(1603年)に刊行した、「日葡(ポ)辞書」には、日本語をポルトガル語によって説明した語彙が、実に3万2800語も収録されており、その頃の両国の交流の幅広さがうかがえる。

なお、かつてオルガンを、漢字で「風琴」と表記していた。今でこそ外国の事物を片仮名で表記するのは当たり前になっているが、以前は、物の名は全て漢字で表記するのが原則であった。仮名文字表記は、正に仮の文字であって、真字は漢字とされており、日本語で正式に名前を付ける場合は漢字表記に限られていた時代があった。外国の地名でさえも漢字で書いていて、例えば、亜米利加(アメリカ)、英吉利(イギリス)、独逸(ドイツ)、仏蘭西(フランス)、伊太利(イタリア)、葡萄牙(ポルトガル)など、全部、漢字で書かれていた。だから今でも新聞で国名を略記するとき、米・英・独・仏・伊・葡などと書かれており、それをまた我々が理解できるのも、その名残である。

西洋の楽器に関しても、漢字表記の原則が適用されていて、ピアノの翻訳名としては、日本での楽器の代表は琴なので、西洋の代表的楽器であるピアノは西洋の琴に相当するから、「洋琴」と書いた。オルガンは、風を使うピアノのような楽器だから「風琴」となったわけだ。序でに、ヴァイオリンは、捧げ持つから「提琴」とされ、アコーディオンは、「手風琴」という可愛らしい名前が付いていた。

洋楽関係の音楽用語には、実によくできた翻訳語も多い。例えば、「奏鳴曲」とはソナタのことだが、原語の sonata を、ローマ字読みの音と、楽器を鳴らすという意味の、双方を生かして、〈奏して〉〈鳴る〉曲、即ち「奏鳴曲」としたところなど、実に見事な言葉の扱い方である。また、シンフォニーを「交響曲」という翻訳名にしたのも、原語の sym(調和) -phony(音) のギリシャ語原の意味を、巧みに漢字に当てはめて「交響曲」としたものであって、心憎い処理である。

それに引き換え、最近では、外来語のカタカナ語による表記が多過ぎるように感じている。例えば、新聞などで「ダイバーシティ」という単語をよく見かけるが、これは「多様性」ということらしい。翻訳語では原語のニュアンスまで伝えるのは難しいので、原語のまま表記したが、その気持ちは分かるけれども、この例などは「多様性」とやっても一向に差し支えないように思える。明治以降、「経済」「哲学」「民主主義」など、いずれも先人たちが作り出してくれた見事な翻訳語である事を、私たちは折に触れて教えられて来た。現代は、こうした造語力が衰えていると言わざるを得ないのが歯がゆいところだ。

以下のような例は、いささか行き過ぎかとも思われるが、かつては、とても丁寧な翻訳命名がなされていたものだ。例えば、フランス演劇の主人公シラノ・ド・ベルジュラックを白野弁十郎、ユーリディーチェは百合姫、モーツァルトのオペラの題名の「バスティアンとバスティアンヌ」を、このままではヨーロッパ語に不慣れた日本人には分かり辛いので、名前から性別が分かるように「バスティア男とバスティア女」とされていたものだ。

洋楽伝来

我が国にオルガンを含む西洋楽器がもたらされたのは、室町時代における南蛮人の渡来(16世紀)に伴ってのことだったが、キリスト教の布教活動に当たって、奏楽用の楽器が日本に運び込まれ、それらの演奏に習熟した日本人信者たちがいたことが記されている。中でも天正10年(1592年)に、九州のキリシタン大名たち(大村純忠、大友宗麟、有馬晴信)が、ローマ教皇謁見のため、天正遣欧少年使節(伊東マンショ、千々岩ミゲル、原マルチノ、中浦ジュ

リアン) を送り出したことは広く知られているが、彼ら少年がローマ法王の前でオルガンを弾いて褒められたというエピソードが伝えられている。また、関白豊臣秀吉がオルガン演奏を聞いたとか、織田信長に仕え、「本能寺の変」で戦死した、森蘭丸が、オルガンを弾けたということを、ある歴史書で読んだことがある。

当時、日本に持ち込まれた西洋楽器は、ポルトガルやスペインから、南蛮船に船積みされて来たのだから、さほど大きなものではなく、小型のオルガンであったと思われるが、現在、それらの実物がなく、まだ残欠すらも発見されていないので、見当もつかないのが残念だ。

声楽に関しては、皆川達夫氏の興味深い研究が行われたことがあった。隠れキリシタンの人たちが歌い継いできた「オラショ(祈祷)」が、現在までの数百年間にどのように日本化されたかを、ヨーロッパ現地の原曲と比較したという、ユニークな研究である。

実は、鎖国時代の我が国では、隠れキリシタンの人々の、洋楽起源の祈りの歌は、世間からは隠された伝承となっていたが、当時の日本人一般の間でも、長崎の出島などにおける異国人との交流を通じて、西洋音楽の影響が、武家や町人に及んでいたという研究がある。

この様な歴史を考えると、西洋音楽が我が国にもたらされたのは、通説である幕末の黒船来航が最初ではなく、正確に言えば、これは二度目の接触であって、最初は、この室町時代の切支丹音楽の流入が、日本民族の洋楽初体験であったと言うのが正しいと思われる。

日本のオルガン

以前は、オルガン(パイプ・オルガン)を話題にする時、人々が抱くオルガンのイメージとしては、昔、小学校の教室などに置かれていた、足踏み式の鍵盤楽器を思い浮かべる人が多かったので、それではなく、パイプ・オルガンという別の種類の楽器であることを、ことさら強調する必要があった。あの鍵盤楽器は、リード・オルガン、或はハーモニウムと呼ばれるもので、空気孔の先に嵌められている金属片が、送り込まれた空気によって振動して鳴る楽器である。多くの人が子供の頃に遊んだハーモニカの蓋を外してみると、金属片(リード)が大きさの順に並んでいるのが見える。それと同じ原理で鳴らされる楽器(リード楽器)が、あの足踏み式の楽器である。今では、この手の楽器はもう見られなくなったので、こうした、余計な説明を予め加える必要はなくなった。

ハーモニカの名誉のために申し添えると、ハーモニカには、玩具ではなくて、本格的な演奏

楽器としてのハーモニカ（クロマティック・ハーモニカ）があって、プロの優れたハーモニカ奏者が何人も活躍している。

我が国のオルガンの普及状況

我が国では、世間一般におけるオルガンの認識が未だに低いように思えるのは、普及の年数が未だ短く、ヨーロッパにおけるように、教会での奏楽を幼いころから聞いて育つという環境にはないので、一般の人たちがオルガンを身近に感じられないためかも知れない。

音楽関係者でも、批評家でさえも、オルガンへの関心を持っている人は、決して多くはないように思える。例えば、新聞にオルガン・コンサートの批評が掲載されることはまず無い。オルガンの演奏会は、外来オルガニストを含めて、結構、数はあるのに、批評には取り上げられないというのは、それらがみんな取るに足らないものばかりとは考えられないから、演奏に対する評価の問題ではなく、関心のあり方のせいであると思われるのだ。

洋楽が輸入され、いろんなジャンルの作品が紹介されてきた中で、オルガンだけが抜け落ちてきたように思える。義務教育課程においても、オーケストラやピアノその他の楽器については、様々な紹介や指導がなされているのに反して、同様なレベルでオルガン教育が成されてきたとは思われない。オーケストラの主な楽器の紹介が、小学校の音楽の授業で行われているのと同様に、オルガンについても、例えば、ストップの音色や表情について子供たちに教える必要があるだろう。そうした基礎知識の手ほどきをすることによって、オルガンへの関心と興味が生まれるものと考えられる。オーケストラの入門・紹介レコードは何種類も発売されているが、オルガンには一つも無い。もっとも、オルガンの場合は、それぞれの楽器の個性が強いので、どの楽器を使って入門レコードを作るかとなると、オーケストラ紹介のように、標準的な解説を施すのが困難だというのが問題点かもしれないが。

こうしたオルガン界の遅れの現象は、一つには、我が国における楽器としてのオルガン設置の状況が、これまで必ずしも十分ではなかったことにもよると思われる。しかし、昨今の状況は、新設のコンサート・ホールには必ずのようにオルガンが備えられており、オルガンを巡る環境は著しく好転していると言えるのではないかと思われる。

明治時代における西洋音楽の歴史で最初に記される人物の名前は、明治13年(1880年)、米国より音楽取調掛の教師として来日したL.W.メーソンである。彼が持ち込んだ何台ものスクウェア・ピアノと共に、リード・オルガンがあり、それを取調掛が購入したとされている。翌年、才田光則がリード・オルガンを試作し、次第にオルガンが普及した。現在のヤマハの前身であ

る「山葉風琴製造所」が明治 20 年 (1887 年) に設立されているが、これを継承した「日本楽器製造」が、明治 30 年 (1897 年) に設立された。その「日本楽器」が、昭和 7 年 (1932 年) に、東京本郷弥生町の聖モテ教会に国産のパイプ・オルガンを建造した。

それ以前に、日本最初と推定される輸入オルガンが設置されている。それは明治 18 年 (1885 年) に東京築地三一教会に入った楽器である。明治から大正年間にかけて、国内では 10 台ほどのオルガンが設置されたが、大正 12 年 (1923 年) の関東大震災によって、その大半が被害を受けた。幸い、たまたま東京築地の聖三一教会から京都に移設されていたオルガンが、京都岡崎の聖マリア教会にあって、消失を免れ、これが現在は、望月



愛知県立芸術大学のルーズベルト・オルガン (出典: 吉田實他編『日本のオルガン』日本オルガニスト教会, 1985年, 133頁)

広幸氏等によって修復されて、愛知県立芸術大学に置かれている (米国、ルーズベルト社製。5 ストップ。東京設置 1883 年。名古屋移設 1981 年)。恐らくこの楽器が、現存する我が国最古のオルガンであると思われる。私もこの楽器を、愛知芸大に集中講義で出講していた折りに、望月氏の説明を受けて見学したことがある。

我が国のオルガン史上、戦前から一般に最も大きな影響を及ぼしたのは、昭和 3 年 (1928 年) に東京音楽学校 (現東京芸術大学) 奏楽堂に設置されたオルガン (英国、アボット・スマイス社製。3 段マニュアル、放射状ペダル。26 ストップ。空気アクション方式。1928 年) だろう。元は、東京麻布にあった紀州徳川家のコンサートホール南葵 (なんき) 楽堂に設置されていたものだが、関東大震災によって建物が壊れ、中のオルガンが東京音楽学校に寄贈されたものである。その当時の徳川家の当主・侯爵徳川頼貞氏は英国に留学して音楽学を修めた人で、当時ロンドンで行われたササビーの競売において、英国の音楽研究者 W.H. カミングスの蔵書を手に入れようと応札して、アメリカ国会図書館と競い、最後は、資料を折半して購入したと言われる。このカミングス・コレクションを中核とする南葵音楽文庫の音楽資料は、わが国の音楽学研究に多大の便宜を提供してきた。その蔵書中には、例えば、ヘンリー・パーセルの

オペラ「ダイドーとイーニ阿斯」の、世界で最も完全な筆写譜があり、かつてベンジャミン・ブリテンが監修したこのオペラの楽譜刊行の際に、英国に貸し出されたことがあった。この他にも、バッハ、ヘンデル、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、その他の大作曲家の自筆楽譜など、多数の貴重資料が、ここにはある。この南葵文庫の一般資料が、一時、本学に保管されていたことがあった。

この奏楽堂は東京音楽学校のキャンパス内にあつて、校内行事のみならず一般に公開されるコンサートにも良く使われていたので、私も学生時代に度々訪れた思い出がある。しかし老朽化のため、取り壊し計画が浮上したり、愛知県犬山市の明治村への移設案が出されたりして、様々な問題提起がなされて以来、奏楽堂の保存運動が起こされ、芥川也寸志氏など音楽人と、日本建築学会などによる「奏楽堂を救う会」が動き出した。紆余曲折の末、台東区上野公園内に東京都が敷地を提供し、文化財としての指定を受けて、一般公開を前提に、移設が決定した。結局、旧東京都美術館跡地に建物が移設されて決着を見たのであった。その後、奏楽堂でのコンサートに足を運ぶと、かつてホールの入口にあったベートーヴェンのトルソーが無く、そこに刻まれていた〈人生は短く、芸術は永し〉というラテン語の標語が見られないのは寂しい感じがした。



奏楽堂のオルガン（出典：吉田實他編『日本のオルガンII』日本オルガニスト教会、1992年、58頁）

このオルガンは、空気式アクションの古いタイプの楽器だが、移設を機に日本のマナ・オルゲルバウによって改修が行われ、暖かい響きがよみがえっている。現代のオルガン製造技法は、昔式のトラッカー・アクションを用いるのが常識になっているが、一頃は、空気式或は電気アクションが最新式とされた時代があって、この奏楽堂の楽器は、当時の貴重な時代の証言者でもある。それに、私見だが、オルガン造りの系統から言うと、ドイツ、フランスなどと比べると、英国の伝統はこの日本では非常に軽んじられているように思える。19世紀中葉のイギリスは、フランスのカヴァイエ＝コルの考え方をイギリス流に翻案した、リード管が支配的な美しい響きを誇る、オルガンの黄金時代であった。ファーザー・ウィリスの尊称を奉られているヘンリー・ウィリス及びウィリス一族その他の英国のオルガン・ビルダーの仕事は、もっと我が国に紹介されてしかるべきだと思っている。

外国の文化文明を貪欲に摂り入れて、何でも存在する我が国の文化の形から見て、オルガンと、そして声楽のジャンルに関しては、英国音楽の影響がいささか手薄ではないかと考えている。

音楽ホールにおけるオルガンの現況。

西欧諸国の音楽ホールにおけるオルガンの設置状況は、先ず教会堂の楽器が先行していた時代があった。そもそもコンサートホールが作られるようになったのは、19世紀に、一般市民が参集する公開コンサートの習慣が定着してからのことで、それ以前は、貴族階級の独占であった芸術音楽は、宮廷内の広間や劇場で行われていた。一般庶民が参加するようになって、広い会場が必要になると、先ずは既存の大きな建物や教会堂が使われ、やがてコンサート専用のホールが作られるようになった。以来、ヨーロッパのコンサートホールには必ずオルガンが備えられているが、その一つの起源は、コンサートに使われ始めた教会堂には必ずオルガンがあったことからの、必然的な繋がりがあったものと考えられる。ピアノと違ってオルガンはそれほど使用頻度の高い楽器ではなく、ホールの備品として不可欠のものであるとは言えないのに、どのホールでも高い費用を負担してオルガンを入れてきたのには、こうした習慣或は伝統を考える必要があるようだ。

以前に調べた統計だが、世界中のコンサートホールにおけるオルガンの年間使用頻度数のデータで、最も高かったのがボストン・シンフォニーホールだったが、それでも全体の10パーセントである。これは、以前、読売新聞社が、読売日本交響楽団を傘下に収めていることもあり、自前のコンサートホールを持ちたいという計画を検討したとき、オルガンを設置した場合の費用対効果を議論した際に出た話題であった。

私自身はオルガンのシンパの積りなので、ホールにオルガンを導入することに何の躊躇もない

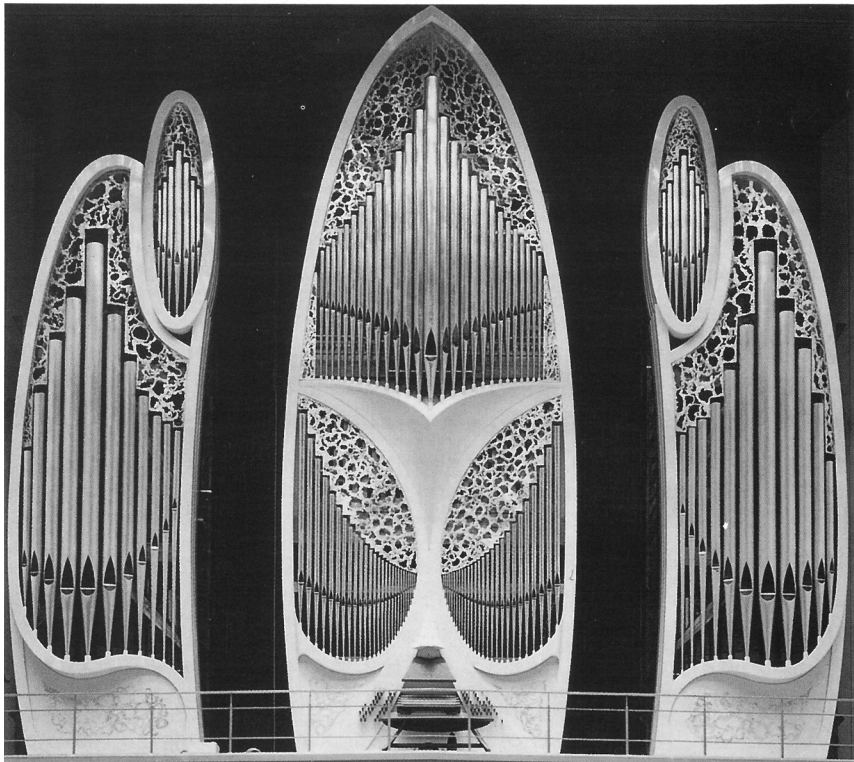
が、世の中は必ずしもそうではなく、新しくホールを建てる時、億単位の出費を加えてオルガンを設置する計画には、反対論も良く起こるものだ。池袋の東京芸術劇場が出来る時、私はオルガン検討委員会（遠山一行委員長）のメンバーの一人だったが、そこに聞こえてきたのは、或る NHK の御偉方が都の幹部に、NHK ホールのオルガン（西独シュッケ社製。92 ストップ。1973 年）など碌に使われていないと話されたため、オルガン導入が一時沙汰止みになりかけたことがあった。それを何とか巻き返して、現在のあのユニークな楽器（フランス、ガルニエ社製。オランダ・ルネサンス型 26 ストップ、及びフランス型 63 ストップ。1991 年）が完成したのである。



NHK ホールのオルガン（出典：吉田實他編『日本のオルガン』日本オルガニスト教会，1985 年，66 頁）



東京芸術劇場大ホールのアランダ・ルネサンス型オルガン（出典：吉田實他編『日本のオルガンII』日本オルガニスト教会，1992年，78頁）



同・フランス型オルガン（出典：吉田實他編『日本のオルガンII』日本オルガニスト教会，1992年，80頁）

我が国に戦後建てられたコンサートホールの最初の例は、大阪のザ・シンフォニーホールであつたが、そこにスイス、クーン社製のオルガン（54 ストップ。1982 年）が入って以来、その後新しく作られるホールでは必ずオルガンが設置されるようになり、〈ホールにオルガン〉はわが国でも常識になった感がある。一頃の、音楽会場といえば公会堂や文化会館、市民会館が主流であった時代に比べると正に隔世の感がある。しかし上野の東京文化会館でさえも、都民にとっては最初の音楽専用ホールではあったが、オルガンは無く、東京芸術劇場が出来る前、せめて上野文化会館の小ホールにオルガンを設置して貰いたいと、皆で陳情をしようかという話があった。



ザ・シンフォニーホールのオルガン（出典：吉田實他編『日本のオルガン』日本オルガニスト教会，1985年，160頁）

こうして我が国のオルガンの歴史は、施設の歩みとしては、黎明期を脱して前進を始めたと言えるが、一般のオルガンへの理解と関心の広がりには未だしという状況にあると言わなければならないだろう。何事につけ、施設を立派に整備するのは日本人の得意とするところである。例えば小学校の教室に、ピアノが備品として整備されている状況は、おそらく世界でもトップ・レベルにあると言えるのではないだろうか。かつてドイツの学校における音楽教育用の備品を比較した報告に、日本の学校におけるピアノの普及率が遥かに高いと述べられていた。それには、ヤマハやカワイ等の楽器会社の営業努力と相俟って、こうした結果が出たものと思われるが、しかしこれを手放しで喜んでみられない。教員の資質・能力から言って、ピアノに頼らなくても子供たちの指導が出来るとする、ドイツ側の反論がそのとき聞かれたように思う。2020年の東京オリンピックに向けて現在繰り広げられている騒ぎでも、スポーツの中身よりもまず競技場建設が話題の中心になっている有様で、そこに利権の影が見え隠れしているのが、いつものこととはいえ、不愉快な話だ。

我が国のオルガンの状況について、「日本オルガニスト教会」が刊行した「日本のオルガン、全3巻」によると、ここ半世紀ほどの間に、日本国内のオルガンは、台数も種類も急速な広がりを見せ、現在では、日本全国に860台のパイプ・オルガンがあるとのことだ。その第3巻に記載されている、20世紀末から21世紀初めに設置された320台のオルガンの製作者の国別分類は、日本(112)、ドイツ(64)、フランス(59)、米国(16)、オランダ(13)、英国(12)、ベルギー(11)、スイス(11)、イタリア(7)、デンマーク(5)、スペイン(3)、オーストリア(2)、カナダ(1)、フィンランド(1)、アイルランド(1)、ルクセンブルク(1)、スウェーデン(1)となっていて、その多彩さに驚かされる。そして国産の楽器の多いことも注目される。

もちろんこれらのオルガンは、個人所有のものも含まれており、コンサートホールにおけるオルガンの現状だけを物語る資料ではないが、コンサート活動における我が国のオルガン文化の大きな特徴は、その世俗性というか、キリスト教とは無関係のあり方が、注目される点である。オルガンといえばキリスト教会の楽器であるとの考えが定着しているが、しかし、オルガンは古代ローマ時代に誕生して以来、初めからキリスト教のものであったわけではなく、むしろ、あのローマ皇帝ネロが、キリスト教徒虐殺に軍勢を差し向ける時、オルガンを鳴らして進軍したという故事があるので、初期キリスト教会にオルガンが導入される際には、信者たちから強い反対があったと言われている。そうした時期を経て、オルガンとキリスト教会の結びつきは強固なものになって行ったとされている。こうした事実を勘案すれば、オルガンを単なる楽器として位置付けるという行き方も、あながち不自然ではないと言えるだろう。明治時代になって、尺八が、江戸時代に栄えた普化宗の虚無僧が祈りの動作として尺八を吹いた(吹禅)法器としてのあり方を捨て、一つの楽器として出発した歩みを思わせるものがある。いず

れにしても、現在の我が国におけるオルガンの位置づけの世俗的あり方は、世界でも珍しい姿なのかもしれない。

「ライル・オルガン」導入の経緯

東京音楽大学に、1976年（昭和51年）に設置されたパイプ・オルガンの導入計画は、それに先立ち学内にオルガン導入のための教職員の集まりを作ることからスタートした。メンバーは、教員＝秋山龍英、田村進、寺田兼文、丹羽正明、植田義子（オルガニスト）他各先生、楽器室＝植竹茂、草刈徹夫、鈴木栄蔵、野町義人などの職員各氏。

設置場所は第一スタジオ（B-100）。教育目的と演奏会にも対応できるオルガンが念頭にあった。スタジオの広さや、使用目的などを考え、一応、3段マニュアル、ペダル、30～40ストップ程度の規模を想定し、全世界の、信頼されるオルガン・ビルダー約10社に引き合いを発送した。数か月後に返事が戻ってきたが、中には西ドイツのアーレント社のように「日本のような非キリスト教国からの注文には応じられない」との理由で断ってきたところもあった。しかし、このアーレント社は、その後、神田のカザルスホールの楽器を受注しているのので、その真意は不明だ。余談だが、その後完成したオルガン自体はきわめて評判の高い楽器であるが、ホール自体が閉鎖の憂き目にあい、この先どうなることかが心配だ。さて、本学のオルガン計画は、当方が希望する工期が3年という条件もあって、最終的にライル社が候補に残り、契約がなされた。1977年5月初めに製作開始、17か月後に完成した。

購入代金の支払方法

オルガン購入の国際的相場では、1ストップ＝300万円が当時の大まかな目安だったので、全ての料金（設計料、材料費、製作工賃、運送費、設置場所における組み立て及び整音作業など）は、この楽器は31個ストップだから $300 \times 31 = 9300$ 万円程度となる（正確な値段は、大学の経理部にも資料が残っていないようだ）。その支払い方法は、全体を5分割し、まず初めの2割を手付として支払う。そのお金でライル社は材料を調達する。残りの8割は、作業員の工賃なので、それを半年ごとに3回に分けて支払い、最後の完成時に、残る2割分を支払うという契約になった。この工賃の部分は、ライル側の要望で、オランダ国内で毎年発表される労働賃金水準にスライドさせて支払う契約になった。結果的に、ほぼ2年間にわたる支払期間の間に、外国為替レートの円高が進み、トータルではかなり得をしたことになった。

なお、ライル社の工房で完成した楽器本体は、いったん解体されて、船便でロッテルダム港

から送り出され（1978年11月15日）、一か月後に東京港に着いた（12月10日）。しかし、オルガン・パイプの中で、楽器正面のフロント・パイプと呼ばれる大型のパイプは、船積みされて横向きに寝かされたまま長い時間が経過すると、鉛や錫の合金で作られた、柔らかい金属パイプが変形してしまう危険があるので、経費は余計にかかるが、航空便で送ることを提案されたので、野本理事長の裁可を得て、大型パイプだけは空輸で千葉県の本原に到着した。ここまでは良かったのだが、そこで事故が起こってしまった。コンテナを陸上輸送のトラックに移す際に、フォークリフトの刃が食い込んで、なんとパイプに刺さってしまったのだ。スタジオ到着後、ライルの職人がハンダ付けで綺麗に修理したが、フロント・パイプの正面ではなく、裏側の場所だったのは不幸中の幸いだったと、今でも冷や汗もので思い出される。

輸入関税免除申請

オルガン到着後、しかるべき手続きを踏むと輸入関税が免除されるという情報を得たので、その措置をとることにした。免税申請の理由としては、大学としての学術研究に不可欠であること、国内では調達できないので輸入せざるを得ないこと、の二点を主張する必要があり、一同鳩首協議の末、免税申請文書を作成して、横浜税関に出向いた。これは首尾よく認められ、その分余計な出費を抑えることができた。

オルガン導入の狙い

本学にオルガンを導入したのは、それを機にオルガン科を作ろうと意図したわけではなかった。ピアノなどのように、教育用の楽器の一つとしてオルガンを備えるのが理由であった。その数年前にポジティブ・オルガン（B-402 教室。オランダ・ライル社製。2段マニュアル、ペダル。7ストップ。1974年）を購入した時から、オルガン専門の教員として、植田先生が着任しておられた。植田先生は、ライル・オルガンを導入する際のキーパーソンの役割を果たした方である。植田先生はドイツとオランダに留学して、古楽奏法を早い時



東京音楽大学B-402教室のオルガン（出典：吉田實他編『日本のオルガン』日本オルガニスト教会、1985年、85頁）

期に勉強して日本に持帰ったお一人で、北ドイツのプレーメンで、オルガンの古楽奏法の先駆者ハラルド・フォーゲルに師事された。このフォーゲル氏は、「北ドイツ・オルガン・アカデミー」の主催者で、音楽学者でもあり、17世紀後半か／ら18世紀初めにかけて活躍したオルガン建造の巨匠アルプ・シュニットガーの研究者として知られ、その研究の成果をライル兄弟に伝授している。植田先生の橋渡しによって、本学のライル社のオルガン設置が実現したのである。

音楽大学のオルガン科

オルガン専攻の学科を備えている音楽大学としては、東京芸術大学、武蔵野音楽大学、国立音楽大学の“御三家”がある。本学は、東洋音楽学校以来の長い歴史を持ちながら未だオルガン科の学生が一人もいない。オルガン科に学生がいれば、それによる教育波及効果は大きいと考えられる。

また楽器として、オルガンはピアノと違って、機械装置の部分が多いので、守備範囲が広く、関連する業界が広がる。それに、オルガニストの職業意識は、ピアニストに比べると、はるかに職人的な感覚を身につけるように育てられているように見える。ピアニストは、調律師がすっかりお膳立てを整えたところで仕事を始めるのが普通だが、オルガニストは、コンサートホールなどでは調律師の仕事を前提にするものの、普段の演奏では、リード管の調律などを自分でする人が多い。かつて野辺地瓜丸という大ピアニストが、或るリサイタルの直前に、調律師の仕事が気に入らなかったのか、自分で調律に奮闘している様子を目撃したことがあったが、通常はピアニストによる自前の調律はまずお目にかかれぬ光景だろう。もっともオルガンの調律は、手近のリード管は別として、躯体（ゲホイゼ）の中に立つパイプ群の調律は、鍵盤を押す人と二人がかりでないとできないので厄介だ。

オルガンの古楽奏法について

オルガンにおける古楽奏法的一端を紹介すると、鍵盤上の指使いでは、かつては、親指は使わなかった。というのは、自分の右手を開いて、目の前に出すと分かるが、親指だけは他の指よりも短く、5本の指先を揃えるためには、掌を丸めて指先を一行に揃えなければならない。これが即ち近代的な鍵盤楽器の弾き方の基本で、親指から順に1・2・3・4・5の指番号が振られている。ところが、昔は、親指は使われず、人差し指から始められていた。しかも、人間の指は、生まれながらにして、人差し指のように強い指と、薬指のように、そもそも弱い指とがあるので、フレーズの始まりのような、くっきりと弾かれるべき音符は、弦楽器の左手の「ポジションの移動」のように、強い指をそこまで移動させて弾く方法が取られていたという。バロッ

ク音楽の演奏法を習得するためには、近代的奏法の勉強とはまた別の修練が必要とされている。

パイプオルガン・レクチャーコンサートについて

「パイプオルガン・レクチャーコンサート」

2015年2月26日(木) B館スタジオ

講師：丹羽正明

オルガン演奏：ジャン＝フィリップ・メルカールト

女声合唱：Chor June (指揮：甲田潤)

曲 目

ヨハン・セバスティアン・バッハ 「パッサカリア ハ短調 BWV 582」

ペーター・コルネット 「サルヴェ・レジナ」

フランシス・プーランク 「黒い聖母への連祷」

当日、配布されたプログラム・パンフレットに載せられた稲葉氏の挨拶文。

【図書館事務長 稲葉良太 ごあいさつ】

「忙しい中、ご来場いただきありがとうございます。ライブラリー・セミナーは、本学所有の楽器、楽譜資料等を使い様々な「音」「音楽」を学生そして地域の方々に聴いていただき、愉しんでいただくため、2009年11月より開催しております。

1回目は、「リュートという楽器の音色」と題し、バロックリュートを中心に楽器と曲の説明、演奏をしました。以降、バロック・フルート、リコーダー奏者 Barthold Kuijken 氏によるレクチャーコンサート、ウィーン楽友協会アルヒーフ室長オットー・ビーバ博士による特別講演「第九初演の真実」、「魅惑の弦楽器を解説と演奏で楽しむ」と題した Wilfried Scharf 氏によるレクチャーコンサートと、海外からの講師の方々ともイベントを開催いたしました。その他にも各種シンポジウム、図書館ロビーでの小規模なコンサート等、6年間に数多くの活動を行ってまいりました。

今回は、1979年に本学に設置されたパイプ・オルガンについてのレクチャーコンサートをお送りします。レクチャーは元本学教授で音楽評論家の丹羽正明先生に、オルガン演奏はジャン＝フィリップ・メルカールト先生に、合唱は Chor June をお願いいたしました。オルガンという楽器への理解を深め多彩な響きを味わう、貴重なひとときになることを確信しています。

それでは、どうぞお楽しみください」

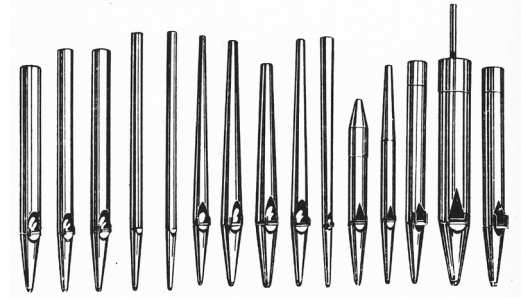
来聴者のために用意した参考資料には、以下のような、パイプ・オルガンという楽器の基本的な事項が列挙された。

「パイプの種類」

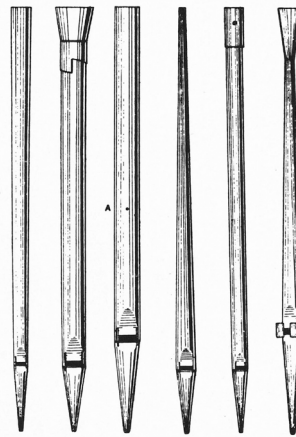
◇発音原理の違いによる分類

【フルー管（唇管）】煙突の形をしたパイプ。
マウスの唇の部分を通り抜けるときに、
振動と音が発生する。

各種のフルー管の外形図



フルー管のパイプ(バロック型)

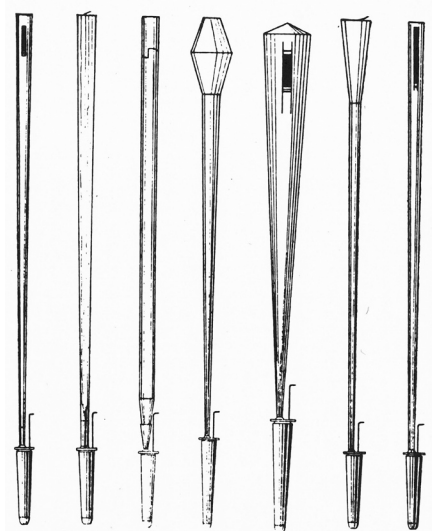


フルー管のパイプ(ロマン派型)

(出典:秋元道雄『パイプオルガンの本』ハンナ, 1982年, 107頁)

【リード管（リード・パイプ）】真鍮製のリードが振動して鳴るパイプ。

各種のリード管の外形図



(出典:同上, 115頁)

◇パイプ開口部の形状の違いによる分類

【開管】パイプ端が開いているもの。

金属製開管

金属製の開管の外形図（横
および正面から）



（出典：オースティン・ナイランド『パイプオルガンを知る本』丹羽正明，小穴晶子訳
音楽之友社，1988年，38頁，図9）

【閉管】パイプ端が閉じているもの。

金属製および木製の閉管の図面

金属製閉管



（出典：同上，39頁，図10より）

木製閉管



（出典：同上，39頁，図10より）

◇材質の違いによる分類

【金属管】鉛と錫の合金。錫の含有量がより多いと、明るく輝かしい音になると言われている。
経費節約のために、亜鉛や銅が使われることもある。

【木管】オーク材、マホガニー、松、梨の木、などが使われる。

「リード・パイプの内部構造」

(出典：オースティン・ナイランド『パイプオルガンを知る本』
丹羽正明、小穴晶子訳 音楽之友社、1988年、43頁、図11)

◇基音系

このグループのパイプは全て開管で、普通は金属製である。中心となる基音系ストップは、オルガン全体の音のバックボーンを形成する。

◇フルート系 広いスケールのパイプで、丸い響きの、笛のような音色。

◇ストリング系 弦楽器を思わせる音色。オルガン型の幅広い、柔らかな音色のものと、オーケストラ型といわれる刺激的で強烈なものがある。

◇リード系 次の三つに大まかに分類される。 1) コーラス・リード、 2) オルガン型のソロ又は特別リード、 3) オーケストラの模倣。

「スライダー・チェスト」

スライダーとは、穴の開いた細長い木片で、各パイプのセットの足許下にある細い溝の中を動くものである。ストップのつまみが引き出されると、スライダーの穴がパイプの根元の穴(フット・ホール) とピッタリ合うようになる。その状態のときに鍵(キー) が押されると、風がパイプの中に入ってゆくことが出来る。逆にストップつまみを押し込むと、スライダーが移動し、たとえパレットが開いても木片の穴がもはやパイプのフット・ホールと致しないようになっているので、風は閉め出されてしまう。

「鍵盤」 Key board [英]

Key (鍵) が board (盤) 状に並んでいるので「鍵盤」と呼ぶ。

〈キー〉とは、ロックされた鍵を開ける道具のことだが、鍵盤楽器においてこの名称がつけられたのは、オルガンの場合を考えるのが一番わかりやすい。パイプが立つ箱の中には、圧力のかかった空気が溜められており、普段は勝手に鳴らないように、パイプの底に蓋がされている。奏者がキーを押すと、トラッカーが動いて、その蓋を開けるので、空気が流れ込んでパイプが鳴る。つまりロックされていたものを解除して音を発生させる道具だから《キー》というわけである。

「トラッカー」 Tracker [英]

tracker= 追跡するもの = オルガンのキー(鍵) の動きを伝える木の棒。

「オルガンの鍵盤構成(主オルガン/スウェル・オルガン/ポジティブ・オルガン/ペダル・オルガン)」

例えば、3段マニュアルとペダル鍵盤で構成されたオルガンでは、マニュアルIを「主オルガン」、マニュアルIIを「ポジティブ・オルガン」、マニュアルIIIを「スウェル・オルガン」、そしてペダル鍵盤を「ペダル・オルガン」で作られている。これらの各「部分オルガン」を、「ディヴィジョン Division [英]」或は「ヴェルク Werk [独]」と呼ぶ。

「レジストレーション」

registration [英] = ストップの選択。register = 登録する。

オルガンの演奏は、ピアノと違って、鍵盤を押せば直ぐに音が出るわけではなく、その前にストップ(音栓)を選んで、音が出るパイプの種類を選択しておく必要がある。その技をレジストレーションと呼ぶ。それによって、様々な音色が生かされて、演奏の結果は異なるものになる。

「カプラー」

coupler [英] = 異なる鍵盤を同時に連動させる装置。日本語でも、一組に合わせることをカップルという英語を借りて表現するが、オルガンで或る鍵盤を弾く際に、別の鍵盤をカップルさせる（カップリングする）と、一つの鍵盤から同時に二つの鍵盤のパイプを鳴らすことが出来て、演奏効果が高められる。

「トレミュラント（トレモロ付加装置）」

tremulant [英] = トレミュラント = トレモロ。「震える」という意味から、音の急速で規則的な反復をいう。オルガンの機械装置では、ストップを操作して、風圧を増減させ、音を機械的に震わせるもの。弦楽器におけるヴィヴラートに似た効果が得られる。

「チンベル」（或はチンベルシュテルン）

Zimbel 或は Zimbelstern [独] = 古代のギリシャ・ローマ人が用いた小型のシンバルの名に由来する、オルガン・ストップの一種で、オルガン・ケースの上部に取り付けられた星形の物を回転させながら、その内部に装着されたベルのセットを鳴らして、明るい音を作り出す。

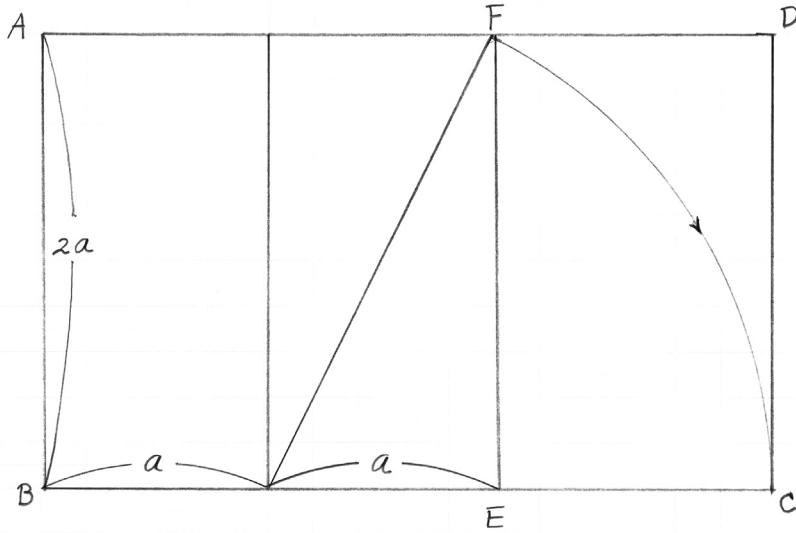
「コンソール（演奏台）」 console [英]

手鍵盤（マニュアル）、足鍵盤（ペダル）、ストップ操作装置を備えて、そこに座ってオルガンを弾く装置。家具のような形をしているので、コンソールと呼ばれる。オルガン製造の職人の中には、この部分を作る際に気合を入れて、コンソールを飾り立てたりすることもある。

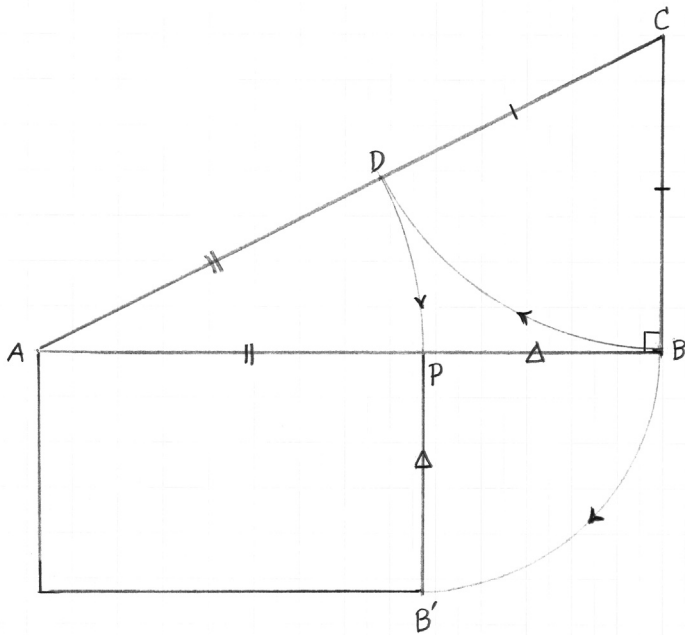
「黄金分割」

古代ギリシャ時代に発見された、線分の分割法で、調和的で美しい比例関係を生み出す。パルテノン神殿などの建築に採用されている。幾何学的に言うと、一つの線分を二つの部分に分けるときの、全体とその内の大きい方の部分との比が、大きい部分と小さい部分の比に等しいようにすること。即ち、線分 AB 上に点 P があり、 $AB : AP = AP : PB$ 、または $AB \times PB = AP^2$ であるとき、この点 P による線分 AB の分割を黄金分割と呼ぶ。以下に、黄金分割の作り方の例を二つ挙げる。

図の $AB : BC$ が黄金比。少数で表すと、 $1 : 1.618 \dots$

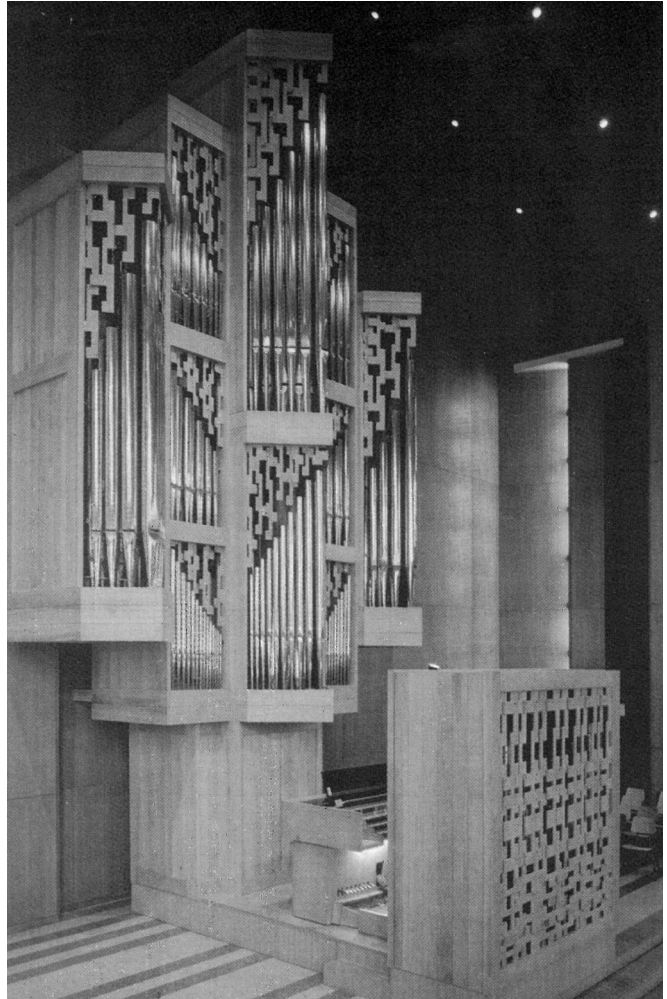


$AB = 2BC$ $BP : AP$ が黄金比。



約 40 分という与えられた時間の中でレクチャーをした後、メルカトル氏に出会っていただき実際にオルガンの音を鳴らし、聴衆の方々には、楽器のそばに移動し、内部を覗くなどして、構造などを理解をして頂いた。小休憩の後、コンサートが行われた。私にとっては、久しぶりに聴くライル・オルガンの響きであったが、柔らかく透明な響きを堪能することができた。

この楽器の特色の一つはリュック・ポジティヴを備えていることだが、昔から、ヨーロッパの教会などにおけるその置き方は、どこも二階のバルコニーから吊り下げられた形になっているのが普通だが、本学のオルガンは、床に置かれているのが特殊であり、響きの印象もだいぶ違うかもしれない。東京三鷹の国際基督教大学教会堂のリーガー・オルガン(3 段手鍵盤、ペダル。36 ストップ。1970 年設置)も、同様に床置き型のリュック・ポジティヴである。



国際基督教大学教会堂のオルガン(出典:吉田實他編『日本のオルガン』日本オルガニスト教会, 1985 年, 94 頁)

以下に、曲目解説を転記する。

曲目解説

ヨハン・セバスティアン・バッハ
(1685-1750) 「パッサカリア ハ短調 BWV-582」

「パッサカリア」は、オスティナート・バスというある一定の音型が何度も繰り返される中で、他声部が発展していくという休みなく続く変奏曲のことで、多くの作曲家によって書かれてきた。バッハはこの作品を比較的若いヴァイマル時代に作曲したが、当時の他の同形式の作品よりも主題が 8 小節と 2 倍ほど長く、冒頭にペダルソロで主題が呈示されるのも珍しいことであった。この主題はバス以外の声部に移されたり、またそのままの形にとどまらず様々なリズムや装飾の変化を加えながら、20 もの変奏を繰り返す。その変奏の終わりと重なるように、

パッサカリア主題の前半部分を主題としたフーガが始まり、大きなうねりが最後まで拡大していくようなエネルギーをもって壮大に曲を締めくくる。(徳岡めぐみ)

ペーター・コルネット (1575-1633) 「サルヴェ・レジナ」

ペーター・コルネットは、1593-1626 の間ベルギーのアルブレヒト・フォン・エスターライヒ王のもとで宮廷オルガニストを務めた。この職にあった時期に、ジョン・ブルやおそらくヤン・ピーテルズゾーン・スウェーリンクなどのヨーロッパの優れた作曲家と知り合う機会を得た。現存する作品はほんの 15 曲の鍵盤作品のみで、その中で最も知られているのが本日演奏する「サルヴェ・レジナ」である。この作品は同タイトルのグレゴリオ聖歌の旋律を用いた 5 つの小品から成り、聖歌隊と交互に演奏するために書かれた。この聖歌はマリアの賛歌で、カトリック教会における最も重要な聖歌の一つとされ毎日のように歌われる。そのため、古くから多くの作曲家がこの旋律を用いた作品を残してきた。コルネットのこの作品は、当時のスウェーリンクを代表するプロテスタントの音楽にみられる厳格な対位法に、カトリック音楽の柔軟な要素が取り入れられた作品となっている。(徳岡めぐみ)

フランシス・プーランク 「黒い聖母への連祷」

フランシス・プーランク (1899-1963) は、近代フランス音楽の作曲家としてミヨー、オネゲル等と共にフランス 6 人組の一人と呼ばれています。声楽曲をはじめ、室内楽、オペラ、管弦楽など多様な音楽ジャンルの楽曲を残しました。この曲は 1936 年 8 月、友人の作曲家ピエール＝オクターヴ・フェルーが、自動車事故によって亡くなったことが作曲の契機となったのでした。

ルカ福音書 18 章 1～10 節に登場する徴税人ザアカイを、彼の地ではアマドゥールと呼ぶが、彼の墓のある洞窟をロカマドゥールと言う。プーランクは、中世以来の巡礼地である、そのロカマドゥールにあるノートル・ダム聖堂を訪ねた。彼は 261 段の石段を歩いて上がり礼拝堂に入る。祭壇の中央には 1 メートルくらいの黒い聖母子像が祀られ、聖母への連祷が唱和されていた。

《何と悲しい聖母像だろう。あの美しいマリア様のお顔が、どうしてこの黒い絶望の色なのだろう。フェルーはもういない。しかし、左ひざに乗せた幼きイエスの隣に、わずかに腰をひねって右脇をあげ、右ひざに巡礼者を抱きとってくれるかのこの聖母子像は、何もかもを赦そうとしている。》

音楽は、軋み苦しむオルガンと、悲しみに祈る合唱との、二つの世界を見せてくれます。黒いマリアの悲しみ。そうさせたものへの怒り。そして自らへの審判。一瞬の光の後、恵まれた地上から高みへと一歩ずつ歩むと、そこには待っていてくれるものが手を差し伸べている。ほんの躊躇いの後、待っていてくれた音と一つになる。だが、そこは平安であっても、悲しみはやはり深い。(甲田潤)

参考文献

文章中に引用したものを挙げ、出版者表記は現行のものに改めた

「バロックオルガンのできるまで」『東京音楽大学ニュース』13号(1979年), 26-32頁

「第一スタジオオルガンの特色」『東京音楽大学ニュース』13号(1979年), 33-43頁

植田義子「ライル兄弟オルガン製作所」『東京音楽大学ニュース』13号(1979年), 44-45頁

ハンス・クロッツ『改訂大增補オルガンのすべて』第9版 藤野薫訳 パックスアーレン, 1979年

秋元道雄『パイプオルガンの本』ハンナ, 1982年

吉田實他編『日本のオルガン』日本オルガニスト協会, 1985年

オースティン・ナイランド『パイプオルガンを知る本』丹羽正明, 小穴晶子訳 音楽之友社, 1988年

吉田實他編『日本のオルガン II』日本オルガニスト協会, 1992年

廣野嗣雄他編『日本のオルガン III』日本オルガニスト協会, 2004年